



TITLE:

# 基督教文明の發展概論(六・完)

AUTHOR(S):

財部, 靜治

---

CITATION:

財部, 靜治. 基督教文明の發展概論(六・完). 經濟論叢 1923, 16(4): 636-652

ISSUE DATE:

1923-04-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128015>

RIGHT:

# 京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第 十 六 卷      第 四 號

大正二十二年四月一日發行

## 論 叢

納稅義務者としての内藏……………法學博士 神戸 正雄  
 價値の類型と個性……………法學士 恒 藤 恭  
 サン・シ  
 モン派の社會改造哲學及び連帶思想……………文學博士 米田庄太郎  
 基督教文明の發展概論……………法學博士 財部 靜治

## 時 論

天然資源の國際的開放の原則……………法學博士 戸田 海市  
 産業組合中央金庫に就……………法學博士 河田 嗣郎

## 說 苑

婚姻年齡の統計的研究……………經濟學士 岡崎 文規

## 雜 錄

失業保險制度の推移……………法學士 一戸 二郎  
 生産者及び消費者としての露西亞……………經濟學士 藤 野 靖  
 世界的貨幣問題とカッセル教授の學説……………經濟學士 小川福太郎  
 獨逸高等官の生計費……………經濟學士 岡崎 文規  
 マックス・ウェーバーの論文集……………法學士 山口正太郎

## 基督教文明の發展概論 (六・完)

財 部 靜 治

### 一六

上來説き來れるが如き、史論を進めたる原著者は、將來の趨勢觀を以て、その評論を結びたり、割合に確からしく想はるゝ豫想と雖も、豫想は結局豫想たり、加之その所説中には、米國の特殊事情に立脚して、立言せるものも存するを以て、吾人は左程重きをおかず、本論を結ぶため一層重視すべき一論旨は、別に尙存すとなす者なりと雖も、順序上先つその所説を紹介せんか。

古代の世界に示されしが如き、中央集權の原理を、晩近世界に應用するは、不自然の例あらん、世には明かに分權的なる、多くの事項あればなり、而も亦強き集權的一傾向が、少くとも從來は欠しき間存在し、近年その力を増しつゝありしことは、之を是認するの要あり、この傾向は放資による小資産が、統御力ある産業主の統制下に、移ることにより最もよく窺はる、そは小所有地が封建諸侯により、移管されしに似たる一過程にして、その間財産經理は大都市中心と、實業上政治上の萬國關係とに、集中されつゝあり、かゝる集中たる純經濟的基礎のみによりては、幾分か疎薄なる組織たるの、事情を續くることあらん(商業及經濟研究第二十八冊所載拙稿特三二六頁參照)されど

最近の戦争又は豫想せらるゝ戦争に影響せられ、一層密實に結束せんとするの傾向あり。

而も尙分權の方向に、その作用を及ぼすべき、幾多の趨勢あるは前に一言せる如し、その一部は經濟的にして、一部は政治的なり、重要な經濟的一因子は、種々の自然的富源を有し、精勵なる來住移民により生まれ、又古き中心の開化と接觸する所あるべき、一邊境地域により、遂げられるべき急激の進歩にあり、理論上よりせんか、かゝる一地域は餘りある放資の流れを、古き地域に向け返すべき、一大工業地區となり得べきも、實際の事柄としては、近世史上起れりと説かるゝを得ず、現に輓近の最大中心地たる倫敦は、第二十世紀に至る迄も、安き資本及個人的資産の、蓄積に於けるその優越を保ち得たり、唯右の如き地方刷新的分權又は均等化の趨勢も、東洋の如くさ迄動的ならざる、人口内への膨脹と、之を結び付けたる際には弱く、又熱帯開化の如く、斷乎として低き開化への膨脹と、之を結び付けたる際には、殆んどその力なしと原著者が評論せるは、資本家本位的倫理に囚はれ、又變遷の趨勢多岐なり得べきことを、忘れたるの嫌あり、抑くとも我邦最近數十年間の發達を、無視せるものと言ふべし。他の經濟的一因子は、重要な新、自然的資源に、科學的利用を施す結果として、惹起さるべき地價移動なり、されどこの因子は敏活なる會社事業に之を照さんか、一分權力としては殆んど數ふるに足らず。何れにしてもかゝる諸影響あるに拘はらず、有産階級と無資産階級との間に於ける、機會平等問題を永遠的に解決す

るためには、何等貢獻する所なし、此問題につき特殊の政策、假令は相續法、非獨占立法等により、多少の輕微なる影響を、及ぼし初めつゝあるは、認めざるを得ずと雖も、將來之がために各國國內及國際間に、患難の種子を。胎せりとすべきは、前に説ける所により明かなり。

されど集權の度幾何に達し得べきかは、兎も角とし、之が増進は國際競争の性質上、避け兼ねるに似たり、凡て實業經理の組織を整へつゝ、その有餘の放資を賢明又密實に國外に向け、又その金融的膨脹と密に連結せしむるに、その陸海軍力を以てすべき、國民は、怖るべき一競争者となる、軍事的侵略は直接には使用されず、否その怖れもなしとするも、尙相當の準備を施すは、衝突すべき諸外國の利害に基づき、避け難く惹起さるべき、葛藤に處するの有效手段なり、それは又野蠻なる從屬國に對し、吸引力ある威光を加へん、かくて國際競争の避け難き傾向は、一國民を密實なる經濟的政治的一單位に組織し、又諸國民をして卓越せる一指導者を中心とすべき、聯盟に組入るゝにあり、交通方便上迅速なる進歩は、更に尙遂げらるべきを以て、疑もなくこの集中を、強からしむるの結果を生むべきや、今日米の法廷にて合法とせらるゝ如き、外國産業との合同が、増さるべきと異ることなからん、唯その傾向が如何なる程度迄仕遂げらるべきかは、之を豫言し得べきに非ず、かくて聯盟の形式又は帝政の形式によれる、世界の完全なる一統合は、好し之が實現を見るべしとするも、それは遠き未來の事蹟たらんと、眞らしく預言され得べし。

帝政羅馬建設の歴史は、一層大なる規模又新しき形式により、將來繰返さるゝに至るべきか、私産倫理に立脚して立論せる原著者は、前記末段の所説中、かゝる成行も實現さるゝことあるべしとの、一幻想を吐露したり、果して然るべきか、吾人は之を知らずと雖も、同時に又吾人は之を詮議するに先たち、過去基督教文明の評論上、別に尙逸し難き着眼點あるを、想はすんは非ず。

基督教は一切の人間解放への途を準備し、何處にも平等及正義觀念を容れしむることにより、宏莊なる輓近文明の膨脹を生みたり、之かために奴隸制を終熄せしめたり、而もそは之か廢止を命令することによらず奴隸も亦同胞及平等たることを、人々に宣言することによりて然り、基督教徒は倦まず又奮勵して勤勞す、而して謹嚴なり、その衣服家屋の奢侈を避け、その同胞を助け、同時に節約す、一面富に對して淡泊なるべきことを、説きつつあり乍ら、尙富の流れ出つべき源泉を開拓す、かくて産業上に實績を擧げ、資本を作出し、自由の基礎を立つとすへきは、\*素より眞ならん、又一般に社會の變遷を觀想し、社會としてその進歩を完うするため、競争の存續は完うさるるの要ありとし、産業競争上弱き諸階級の、直接利益擁護の趣旨により、競争の廢除を主張すへき社會主義は、生物學的頽廢及死を意味すと論しつつ、西洋文明の一切を通し、基督教の理外理的承認により、生れ出つる一過程は經歷せらるへしと主張し、かくて世は他愛主義に

\* cf. de Laveleye, *Luxury* pp. 132, 133; the same author, *Elements of Political Economy*, p. 44.

傾き、諸下層社會を高むへし、そは社會主義に向はす、寧ろ一切の階級をして、一層完全なる平等の地歩、即ち機會の平等により、競争せしめ得へき、一狀況に向ひて、進み行くへき一民主制益々擴大さるるによりて然りと觀するも、一面の眞理を含める、一評論とすへきものあらん、而も亦時勢を之とは逆に觀想する結果、「未來の不信神」*L'irreligion de l'avenir*を叫ぶ者、一のGuyauに限らず。

吾人は曾て「社會の羈絆力」を論し、宗教及教會の威力により、輒近個人生活及公衆生活を、羈束するの力薄らきたる理由につき、略說せることあり(本誌第九卷六四一頁以下参照)かくて又曾て英國の副監督 Arthur Penhyn Stanley (一八一五—一八八二年)か、教會の社會的職分重大なるを認めつゝ、一切の歴史は教會の歴史なりと迄、極言せることは反對に、教會が衰替しかけたるを信せんとする者も起れり。而も亦穩健なる見解よりせんか、教會は崩壞の途上に非ず、推移しつつあるに過ぎずとすへきに似たり、將來の社會は、宗教なくして存立し得へしとするの信念、正しきこと諸合はれざるは、社會は政府なくして、存立し得へしとするの信念、然るへきと異なるなし、社會進歩するに従ひ、宗教はその必要を減すべしとすべきに非ず、複雑なる社會にありては、社會統制を計るの必要を、増大すべしとする單純理由よりするも、寧ろその必要を増すべしと、一應は斷し得べし、<sup>\*\*</sup>現に大に發達せる社會組織にありても、教會を以て永遠的一必要施設たらしむへきこと

\* cf. B. Kidd, *Social Evolution*, 1894.

\*\* cf. Ellwood, *Sociology and Modern Social Problems*. Rev. ed. '13, p. 377.

を、立證すべき事由として、尠くとも二者を擧げ得べきに似たり。即ち第一に個人は自己のため又相互のため、精神上助援的なる、一環境を創造するの要あり、詳言すれば生命を高尙ならしむべき、諸觀念及諸感情が、社會的暗示及同情的薰染（サツザエツシヨシラヂコーシヨシ）により、弘通又昂進せられ、由りて意識圓熟せざる仲間にも、實着なる性格を養はしむべき、一環境を創造するの要あり、而して其點につき明かに銘記せらるるの要あることあり、即ちそは人の生活を以て諸現象中、最も可變なりとすべきも、そは原因結果の支配ある一物たり、諸必要條件を充たすことを、條件としてののみ、その性格、仕事及眞價上、最良の結果を期待し得べきこと之なり、人は可能的には摩天樓の如く、幾多の階を有し得べきも、その最高階に住まんと欲せば、ために便利なる一昇降機を必要とすべきこと之なり、而して右の如き必要條件は、主として吾人の力により、吾人を圍繞せしむべき、社會的暗示及薰染の、秩序正しき流れに、之を求むべきなり、かくて教會は最高生活のために肝要なる、社會的諸條件を授けんとする、熟慮的努力を代表す、その作用上宗教は、識別を土台とし、依りて諸觀念諸感情中、生活をその最高標準に高むへしと、經驗により發見さるべきものを、知覺するに注意す、氣品を高潔ならしむべき諸觀念と、生活を卑劣ならしむべき諸觀念とを、注意して識別す、宗教改革の如きも、かかる注意積り積りて成れる一調節なり、宗教家は生命に品位及眞價を、與ふべき諸觀念諸感情を、常にその注意の尖端に掲ぐることに、必要な勞苦を注ぐ



へき人なり、素より以上説ける所は、由來現存したるが如き宗教につき、然りとすへきよりも、宗教が進み行く文明に處し、永遠的一元素たるへしとせば、當然その通りなるへしと、せらるへき宗教につきて然り、一面既定宗教及教會を以て、時代遅れの一施設と罵りおきつつ、輓近生活の諸條件に適應したる一宗教を以て、輓近社會に於ける實際的最大急務の一と、主張するも、必ずしも矛盾とすへからざる理由は茲にあり、歴史上よりせんか、宗教は品性を墮落せしむへき、幾多の元素を含み、煩瑣なる末事を、滿載さるるの傾向を示せること多し。第二に宗教はその信者のため、個人的啓發を遂げしむるの、一機關としてのみならず、純倫理的、目的のため有力なる社會的表明を與ふるの機關として、永遠の一職分を有するに似たり、社會内には一の組織あり。何等の商業的目的を求むることなく、一向專念少しにても倫理的意義ある各問題につき、社會の倫理的意見及感情を、指導し撫育し統一し、又諸倫理的目的を振張すへき、實際的活動を編成するを要す、危福視すべきは、教會がそれ自體として死期に瀕し、只管舊來の勢力を恃みつゝ、實社會の急務に順應するの積極的努力は、殊更に之を回避するの態度を採り、かくてその生命を求めて、却りて之を失ふの事實にあり。\*

右の如き機能は、教育によりても幾分か之を果たし得べし、されどその効果を充分に發揮せしむるの目的は、之を宗教に待つの外なし、而して既存宗教及教會が、かゝる社會的二職分を、有

\* cf. Hayes, Introduction to the Study of Sociology, 19, pp. 685-687.

效に果たしつゝあるや、將た第二宗教改革の必要目前に迫れりと、なすへき事情ありとすへきに非るやは、大なる時事問題たり、西洋史上の第一宗教改革が基督教の遍照 *Catholicity*、換言すれば教會の統一を破れると反對に、世界萬邦を包容し、等しく之を遍照すへき、一新宗教建設に努むるの必要なきは、獨及佛の如く基督教が現存者の生命に對し、由來大にその威力を失へる國にても、再ひ考へられつゝあるに似たり、そは又當に基督教のみならず、佛教のためにも問題とされ得へき所なり、而して此問題に對し、解答を試みたる人も尠きに非すと雖も、吾人は輕々しくかゝる大問題を、取扱ふへきに非すと考ふるを以て、今之を問はす、着眼點を代へて更に尙評論する所あるへし。

私産經濟學理を是認し、米國の經濟的大發展を謳歌するの念に驅られつゝ、その發展の裏面には、近時に至り基督教の進歩、及あらゆる階級に於ける人道的感情の發展あり、かくて百年前には單純なる一出來事視されし諸事物も、今や吾人を憂慮せしむべき、問題視せらるゝに至りし事實を、不問に付せるの嫌あるは、原著者の態度なり、實に吾人の社會的實在、即ち存在せる事柄と、吾人の社會的理想との間に於ける、矛盾あるは心苦しとの論旨を掲げ、*Ely* が前にも引用せる著書中、評論せる所は、約三十五年前の所説に屬すと雖も、\* 今尙新らしき心地せらるゝを以て、以下之を引くこととせん。

\* cf. *Ely*, op. cit., pp. 55-59.

Sir Henry Maine の一著書「村落共產制」より引ける數節は、基督教進歩の意義を、理解せしむるに資するものあらん、即ちメーンはこの數節中、氏により經濟の原則視せらるゝものか、沿ねく世界に容れらるゝことなし兼ぬる事實につき、一解釋を求めつゝあり、即ち氏は經濟上の事柄につき、私利を圖るを經濟の原則とし、賣り得へき物品につきては、收め得へき最高代價を求め、物品購入には最低代價を求め、又最低市場に買ひ、最高價の市場に賣らんとすとなす、而して氏は最高一因子としての、利己を是認せるも、別に人間には通有の一道德的感懐あるかために、氏か經濟の原則と呼び、又誤りて經濟の原則と推測せるものに、背馳すへきものあるを注意せり、かく利己を最高の一指針として、容るゝを躊躇することに關する氏の解釋は、歴史的なり、詳言せんか「市」はその初め、「二三の村の境域か、輻合せる」地方に横はるへき、中立地に開かる、是等の村は共產體にして、その内部にありては物價を左右せるもの、競争に非ずして風俗に存したり、されど萬人か「市」に赴くや、外來者として然り、「市」にありては「詐欺的行爲及醜き値切り」昌んに行はれたり、かくてメーンは言へり、「予の考ふる所によるに、自己の商品につき、最良の代價を收むるの權利、その人にありとするの觀念は、市にその起源を發し、次いて世界に普及せるものなり」と、更に進みて「市場法規」の發達を評論せる後、古き理想の殘存を、次の如く説明せり、

「高利制限法の廢止は、金錢につき如何なる利率の利子を、とることをも合法たらしめたり、

されと高利とすへき利子をとることは、體面を保つの途と考へられず、而して、我衡平裁判所は、新原則を完全に承認するの氣分となるには、明かに大困難を感ず、この一例を銘記する限り、予か一問を發することゝし、一近親又は一友人と、苛酷の取引を行ふを以て、名譽とすへきに非ずとするの感情か、惹起さるへき起原何たるかを問ふも、無駄と考ふることなきを得ん、然るにその間一の道德規則あり、之を禁ずとは説かるゝを得ず、私見によるに、右の感情は、自然的群に結束せらるゝ人々か、商業の原則により、相互間に取引することなしとする、舊觀念の痕跡を宿せり、……經濟學の基本たる普通命題が、始めて眞理に近きことゝなるに至りしは、同一群の組成員としてにはあらず、外來者として不親切に折衝することを、人々に許せし、唯一事情の下に於て然り、……動産につき最良代價を收むるの觀念さへも、氣付かれざるか如き步調により、這入り込むことによりてのみ、その採用を見るに至れりとせば、土地につき收め得へき最高地代を探るの觀念は、比較的近時に起れるや、確實と言へぬ計りなり、土地の地代は貨物の代價に相當す、されと地代が經濟的法則に則れること、甚だ遅かりしは疑を容れず、蓋し諸貨物が個人私有財産の、物體となれる後も尙永年の間、土地所有に於ける同胞關係の感銘は、殘存したればなり、村落共產制により住まれたる一國に於て、競争的地代なからんこの推定は、極めて有力なるへきを以て、かゝる地代が社會の粗野狀態の下、何處にか存在せ

ることを、得心し得べきためには、極めて明白なる證據を要す、………渺くとも英蘭にては土

地は、一般的に競争的地代ラッシュレンダウによれることなきや著名なり、」(苛酷な地代 rack-rent とは競争的地代に當る

へき、英の専門語に外ならざることを、説明するの要あり、尙英國の土地が今日尙米國、加拿大又は歐洲の實狀上、示さるる

か如き程度迄、資本化商業化されたるものにちやひは Ashley, Economic Organisation of England, p. 65 參照)「われ

と理論的權利行使されざることは、何處にて然るかを考ふるに、舊村落共產體に代りし、莊園

體殘存せし所、何等の競争的地代なしとすへきは、事實上眞なり、時として封建的感情と呼は

るゝものには、苛酷の取引を禁ぜし、舊同胞感情と共通なるもの多し」

と、前世紀に至り革命的唯物主義の波浪、世界を一掃するや、學者或は倫理と經濟とを反目せし

め、事業上倫理學を經濟學の下に立たしめ、立法上社會上の諸問題を論するに當りても、その胸

中に宿せる大眼目は、最大の可能殖産に存し、生産増進否私益の増殖を考量するに當りては、人

道的考量は之を迂くるの要ありとするか如き風あり、前記メーンの所説は、史實を提けて必ずし

も然らざるを、抗議せるものなり、而して此一節を引きおきつ、吾人は今や進みて、是等制限の

意義理解に努めんと前置して、Ely の評論せる所は、倫理的樂觀に流れ、實社會に忠實なりとす

へきよりも、彼自身抱持せる宗教的信念に、忠誠なりとすへき嫌あるに似たるも、(尙本誌第十三卷

八五四頁參照)前にも説ける如く拜金の經濟學説に富みし、米國學界に授し、獨逸倫理派經濟學の流

れを汲みつゝ、一家言を立つるの意氣熾んなりし、氏が當時の立場に照せば、恕すべきものありと考ふるを以て、今姑らくその所説を、その儘引きおかんか。

經濟學は一部の人により、「詐欺的行爲及酷き値切り」に關する、學問たりと想像せられ、かゝる詐欺的行爲及酷き値切りの事實、存在すとの假定を立つべく、又兩者を正當視すべきものと考へらるゝは、大體にメーンのなせるか如し、されど吾人は知れり、是等の所謂經濟的原則は、人々か外來者として會合せる時に限り、起り得たりしことを、又現時に於てさへもその原則は、同胞の感情と兩立し得へきに非ることを、「一近親又は一友人と取引して値切り倒す」ことをも、自慢とすべきを幾度か請合ふ人ありとするも、それはその人の勝手なり、されどそれは何等の甲斐なし、人心中には一の倫理的感情あり、それは歴史的經驗の結果として發達し、宗教により溢まされ強められたる一感情なり、その感情は吾人に告ぐるに、經濟界に於ても他の生活範圍に於けると同様吾人の隣人及同胞の福祉促進に、努むるの要あることを以てす、この倫理的感情は輕視さるへきに非ず、幾世紀の間最上の善人か、努力せる結果としての最良產物なればなり、メーンは詐欺的行爲及酷き値切りのみ、行はるへき「市」が凱歌を揚ぐるに至り、右同胞感情は之に途を譲りて、消滅すべきことを注意せり、素より輓近通信運輸方便改良による最初の結果は、同胞感情を喪はしめ、又は寧ろ大に弱からしむることに、存したりとすべきものあらん、又舊來の地方的群は、

その結果疑もなく破碎せられ、その組成員は追ひ散らされたり、世界の一劃に移住し行くことは容易となれり。されど又通信運輸方便の改良に一步を進め、特に虞らくは全國及萬國郵便制起りてより、世界の諸地方全部を、前古何れの時よりも一層親密に、引寄せつゝあり、かくて同胞感情は、かの一切の外來者を、外人視せる地方的同胞群内に限らるゝことなく、廣く引延はされて、一切の人々を包容しつゝあり、かく同胞心が擴大さるゝと共に、最初は右の倫理的感情大に弱めらるゝへきは、前に一言せるか如し、蓋し一般に諸現象につき、外延の擴大には、内包の減損を伴ふべきことを、注目し得べきを以てなり、そは一河川が突然その川筋を、廣けたるにさも似たり、流れは一層廣げらるゝへきも、前と同様に深きことなし、されど經濟的諸束帶と、一切の人々同胞たるを教ゆへき、基督教の進歩とは、廣き基督教家族を通し、迅速に同胞感情を強めつゝあり、その一大家族の輓近進歩は、經濟的利害の一統一を、生まんとするの傾向あり、同胞の經濟的世界同盟は、建設の過程にあり、社會の諸事情につき、吾人は心配及不安を懷くも、何故に斯くの如くなるべきかにつき、その大部分の理由を授くるものは之なり、營利は倫理的原則の支配より除かると言ふは、何等詮なきことなり、何たるかは兎も角實際的效力を有すへき、倫理的原則現はれ出つるの要あるは、恰も經濟生活に存すればなり、倫理學と經濟學とは、かくて分離さるゝを得ず、換言すれば倫理學の最終語は、人々の他の行動範圍に於けると同様、經濟活動に於ける

人々にも、應用さるべき必要あり、素より古き倫理學そのものは、之か處置に窮しつつありとも考へられ得べく、諸時代が發展せしめたる倫理的原則は、それ自體としてその時代に相對的なるものに過ぎず、されは夫等の原則は、現在事物新秩序の下、「詐欺的行動及酷き値切り」の、新倫理に讓歩すべき、運命にありとも想像され得へし、想像され得へしと予は言へり、されどそれは實は想像され得へしとすへき以上なり、實に舊倫理を晩近實業に適用することに、反對なりとの主張を貫くへき人々よりせば、必要なる一假説視さるる迄に重んぜらる、蓋し矛盾せる林料を捉へ來りて、倫理學と經濟學とを、打立て得へきに非れはなり、かくて何人か起り、一新倫理學を編まんとするも、そは予輩の間ふ所にあらす、寧ろ私見によるに大多數の人にとりては、基督の倫理的教訓は、狭き社交生活に於けると同様、經濟及政治生活にありても、依然として行動の眞基礎たるの要あり、而してかかる一準繩に照して秤らんか、多くの所謂經濟的政治的行動は、悲しむべき程度に不完全たことを發見せん、詐欺的行動及酷き値切りか、いつか人々にとり道德的に正しと、映し得へきことありとしても、そは不完全なる一社會狀態に於てのみ然り、社會生活の諸部面一切をして、倫理的諸原則に従はしむるは、眞の普通決斷なり、こは基督教徒により使用さるる語句、「世界は贖罪の種子なり」と説くことにより、意味せらるる所なり。

以上による右の所説に、多少の疑を挿むへしと考ふるは前述の如し、而も亦方今私產本位經濟



の弊に憤慨し、或は博愛、或は忠恕、或は克己、或は至誠奉公と言ふか如き、一大徳目を掲げ、社會文明の歸趨は茲に存すと觀し、或は將來の理想を茲に置かんとし、對世及對外關係に於て之を主張せんとする、幾多の論者に對し、氏は一先覺者たりと説くも過言たらざらん。之と同時に注意すべきは、本論によりて紹介せる G. R. Davies か、前記の著書に於て以上纒陳せるか如き、態度を探れるに拘はらず、戰爭中の一著書「社會的環境論」Social Environment 1917 にありては、氏が環境の社會一年後と異なる所ありしかためか、理想主義の力と題して評論せる所、却つて本論のために多大の興味を、喚起せしむることなり、吾人は以下之を紹介して結論に代へんか。

時代に貢獻せんとする人は、その他何物よりも一層強く、理想主義を獎勵すへし、世界にとり貴重なること、正義の幻想に如くはなし、形式、色及音の美は、之に組合はされ、眞理は之か武器たりと雖も、正義そのものは社會の靈なり、而して正義の理想は、進歩の動力なり、その思想は宗教及藝術の、諸表象に表明せられて、強要的精神となり、依りて人々を説得し、献身的協力に參可せしむ、そは適法概念ソイグザクトとは全く異なる一物なり、民事裁判所は所謂公平を標榜するも、その中には利害と利害とか、昔ながらの策略を交へつつ争ふべく、その公平が賢明なる同情の活正義に對する關係は、離婚裁判所の理想的家庭に對する、關係にさも似たり、西洋文明は「Jesus or Nazareth」の崇高なる物語を、正義の標準なりとして、形式的には公言す、現今破廉耻なる商業主

義、跋扈し、福音も之に驅使せらるるがために、心正しき多くの人は、福音を忌むと雖も、それは今尙精神的勢力の、最も著しき貯水池として存立せり。素より不幸にも極惡なる誅求者は、間々信心深き基督教徒なり、是等の人々が剪毛せんとしつつある、その羊に對し、無抵抗の同胞愛を強ゆることは、一の口癖となれり、今日一生懸命に努むるの要あるは、吾人の理想主義と、吾人の言行との間に、恐るべき大隔絶あることを、明白に又力強く實感するにあり、理想主義の強味は、その實行にあり、之が實行につきては、科學的幻想を要す、人々は利己の名義に縛られて、思案しつつあるを以て、愚痴の迷霧内につつまれ、狡智をも奉公として正しとなす、近年アン・グロ・サクソン商業主義の卑劣に對し、退治せんば已まざるの熱誠を以て、之を攻撃せる獨逸の諸學者は、時としてその眼界内に、一二の大事實を看落せるの譏りありとしても、それは大體に正當なりき、英米に於て爛漫として、昌へつつある金儲けの理想は、一の偽善的詐欺なり、公然の嘘に比し、一層危險なる半眞理なり、それは基督教が由來一敵として戦へる所にして、又自から一詐欺たるを欲せざる限り、再び戦ふの要ある所なり、その宗教は禁欲主義を意味せず、物質的意義によれる潤澤なる生活は、値打ある一理想なり、富につき非難すべきは、それが使用と引離されたる所有の特權たる、その性質にあり、それは閑人階級貴族制が、その存立の土台となせる所にして、道徳上不當なる一特權なり、人々は「資本を供給す」てふ、調子よき語句により、その事實を包み

つゝ、合法的賄方格に附纏ひ、之を以て實業的活動の、隠れもなき一事相となし、かくて收入を生むの一事由を重ね、不徳なる財産搜しに當るに拘はらず、夫等の人々は貪婪なるを以て、その事實を見ざらんとす、吾人は別事に托し、遠在大地主主義として非難する、同一なる主義は、洪大なる工業財産の全範圍を通じ、無羈束なる資本家本位主義の下に、横行しつゝ、猖獗を極む、明白なる事實によるに、社會の財産は、可能的最大收入を收むるを以て、その一大目的視せる人々により「放資」として一生懸命に摺み取られ、その結果としての奪ひ合ひに逐はれ、かくて社會的價值及公共福祉は看過せらる、現在の諸施設を迅速に變じ得ざるべきことは眞なりとするも、良心が市場の諸標準に、眠りつゝ賛同し、基督の假面を粧へる、福神により欺かるゝ間は、全く道德的安康あるを得ず、大戦は大體に基督教諸國民が、貿易及放資により、未開の諸民族に「貢獻」せんとする、公然の希望に驅られて軌轢しつゝ、貪婪を堆積せる結果なり、米人としては米國が、組織及動機上その趣を異にするものありとの、勘違ひを好みて懷かんとするも、實際の事實上同國は、不治放任的商業主義の、最著例として聳え立てり、前途に横はるものは、急切なる對内反對外諸問題の形式上、拜金主義への責を負ふことにあり、諸事實を嚴肅に實感し、銳意實際進歩の方向に、進むことによりてのみ、吾人は救世を達成するを得ん。(完)